

# 『学道用心集』における学道について

神 戸 信 寅

は考えられない。そこで、少しでも禅師の仏法を理解するために、「学道」の意味するものについて、本論では特に『学道用心集』に説かれている「学道」に限って窺つてみたい。

さて、『学道用心集』は周知のように、第三章、第六章のおわりに、それぞれ「天福二年甲午三月五日書」と「天福甲午清明日書」として記されていることから、天福二年（一二三四）禅師三十五才前後に撰述されたものといわれていて。禅師の三十五才前後は、禅師の仏法展開において一つの転機となつた時期として注目にあたいます。即ち、「弘通のこころを放下せん」（「辨道話」）として一時、深草閑居の生活に入り、正法宣揚の來たる時節を待つていた禅師は、この『学道用心集』の前年に、外護者（藤原教

筋道を少しでも究明しておくことは、道元禅師（以下禅師）の流れを汲む者や、その仏法を理解せんとするものにとっては、きわめて大切なことであるし、また、基礎的なことであるといわねばならない。禅師の生涯は「学道」を志ざし、「学道」を身心脱落により体得し、その体得した「学道」を行じるとともに、参学の学人に「学道」の仕方を開示し、一箇半箇なりとも真実なる「学道」の学人を打出せんとしたものであった。このことを思えば、禅師から「学道」を切り離して、禅師の仏法を理解し語ること

『学道用心集』における学道について（神戸）

はじめに

「道（菩提・仏祖道）」を「参学」する学人にとって「学道」とは何か、如何に学道すべきかと、その構造や学道の

筋道を少しでも究明しておくことは、道元禅師（以下禅

師）の流れを汲む者や、その仏法を理解せんとするものに

とっては、きわめて大切なことであるし、また、基礎的

なことであるといわねばならない。禅師の生涯は「学道」

を志ざし、「学道」を身心脱落により体得し、その体得し

た「学道」を行じるとともに、参学の学人に「学道」の仕

方を開示し、一箇半箇なりとも真実なる「学道」の学人を

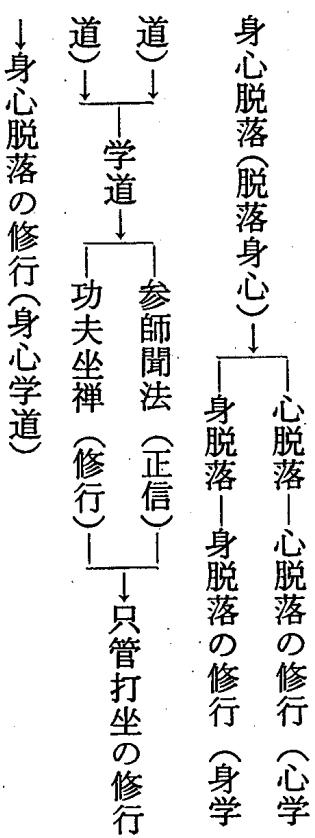
打出せんとしたものであった。このことを思えば、禅師

から「学道」を切り離して、禅師の仏法を理解し語ること

『学道用心集』における学道について（神戸）

家・正覚尼等）の請により山城に觀音導利興聖宝林寺を開き、夏安居を設け、最初の示衆である『正法眼藏』「摩訶般若波羅密」の巻を示し、『普勸坐禪儀』を淨書し、さらに俗弟子楊光秀に『正法眼藏』「現成公案」を書き与えている。そして、禪師の仏法相続に大きな足跡を残した懷奘をはじめ、多くの僧俗がその会下に雲集してきた。それに答えるべく、翌年（一二三五）には「宇治觀音導利院僧堂勸進疏」を作し、清規にそつた本格的な僧堂の建立を発願するといったように、帰朝早々『普勸坐禪儀』を撰述し弘法救生を念としていた念が再びよみがえって、対外的にも積極的に働きかけはじめた。こういった時期に『学道用心集』は会下の学人のために「学道」の用心を説き明かしたものである。

この『学道用心集』において「学道」の原動力となつているのは「參師聞法」と「功夫坐禪」とである。この「參師聞法」の「正信」と「工夫坐禪」の「正修行」とによつて、学人をして禪師が「身心脱落」によつて得た仏祖道に証入せしめんと「身心脱落の修行」としての「学道」を示されたわけである。そこで、いま、「參師聞法」「功夫坐禪」と「身心脱落」との関わりを示せば、



となる。ここにおいて、「身心脱落」の「心脱落」と「身脱落」は「学道」のための「心脱落の修行」と「身脱落の修行」となつていて。そして、この「学道」は、学人にとっては「參師聞法(正信)」と「功夫坐禪(修行)」とよつて「只管打坐の修行」を打出すことによつて「身心脱落の修行(身心学道)」としての「学道」ならしめて行くのであるが、以下、このような在り方をもつた「学道」について、その構造を概観してみたい。

### 一、学道の概観

仏祖道、あるいは道(菩提)を参考する「学道」の「參師聞法」と「功夫坐禪」とが、禪師自身の学道における「身心脱落」の体験に踏えられて、どのように学人の学道の上に展開されているか。また、「參師聞法」「功夫坐禪」

といった学道が、どのような役割をなし、働きをなしてい  
るかについて、まず、その手掛りを得るために『学道用心  
集』の本文中にある「学道」を摘出すれば、

①学道は思量分別等の事を用ふべからず、常に思量等を  
帶びて吾身を以て檢点せば、是に於て明鑑なる者な  
り。（原漢文、引用文は岩波文庫本、以下同じ）

②仏書を伝ふと雖も仏法を忘るるが如し。其の益是何  
ぞ、其の功終に空し。是れ乃ち学道の故実を知らざる  
所以なり。哀むべし、徒に労して一生の人身を過すこ  
とを。夫れ仏道を学ぶに、初め門に入るの時、知識の  
教を聞いて教の如く修行す。

③若し此の故実を知らざらん者は、学道未だ辨ぜず、正  
邪奚ぞ分別せん。

④右、学道の丈夫は、先づ須らく向道の正と不正とを知  
るべし。

⑤而今、学道の人は未だ道の通塞を辨ぜず、強ひて見驗  
の有らんことを好む。錯らざるは阿誰ぞ。

⑥夫れ学道の者は、道に礙へらることを求む、道に礙  
へらるる者は悟跡を亡<sup>ム</sup>するなり。

⑦仏道を修行する者は、先づ須らく仏道を信ずべし。仏

『学道用心集』における学道について（神戸）

道を信する者は、須らく自己本道中には在って、迷惑せ  
ず、妄想せず、顛倒せず、増減無く、悞謬無しといふ  
ことを信すべし。是の如きの信を生じ、是の如きの道  
を明め、依つて之を行ぜよ。乃ち学道の本基なり。

である。①は第六章「参禅に知るべき事」の文中、②と③  
は第七章「仏法を修行し出離を欣求する人は須らく参禅す  
べき事」の文中、④から⑦までは第九章「道に向って修行  
すべき事」の文中の言葉である。その他、「参禅学道」と  
か「学仏道」といったように「学道」に関連した言葉をも  
加えれば、さらに多くを数えることができる。しかし、右  
の語句よりするに「学道」とは思量分別等を離れたもの、  
善知識の教えの如く修行するもの、道の学び方が正しい方  
向をもつたもの、見驗とは関わりないもので、ありとせば  
「道」そのものになり切つて行くものであつて悟跡さえ亡  
びたものというのであるから、「学道」は対象論理的に学  
ぶという意味ではないことがわかる。それでは、どのように  
に学ぶものかといえば、「自」本道中には在つて「学ぶべき  
もの」ということが基本になつてゐるという。即ち、仏祖道  
中には在つて、更に「学道」をするというのである。この  
ことは、我々の自己中心的な思量分別の入り込む余地のな

『学道用心集』における学道について（神戸）

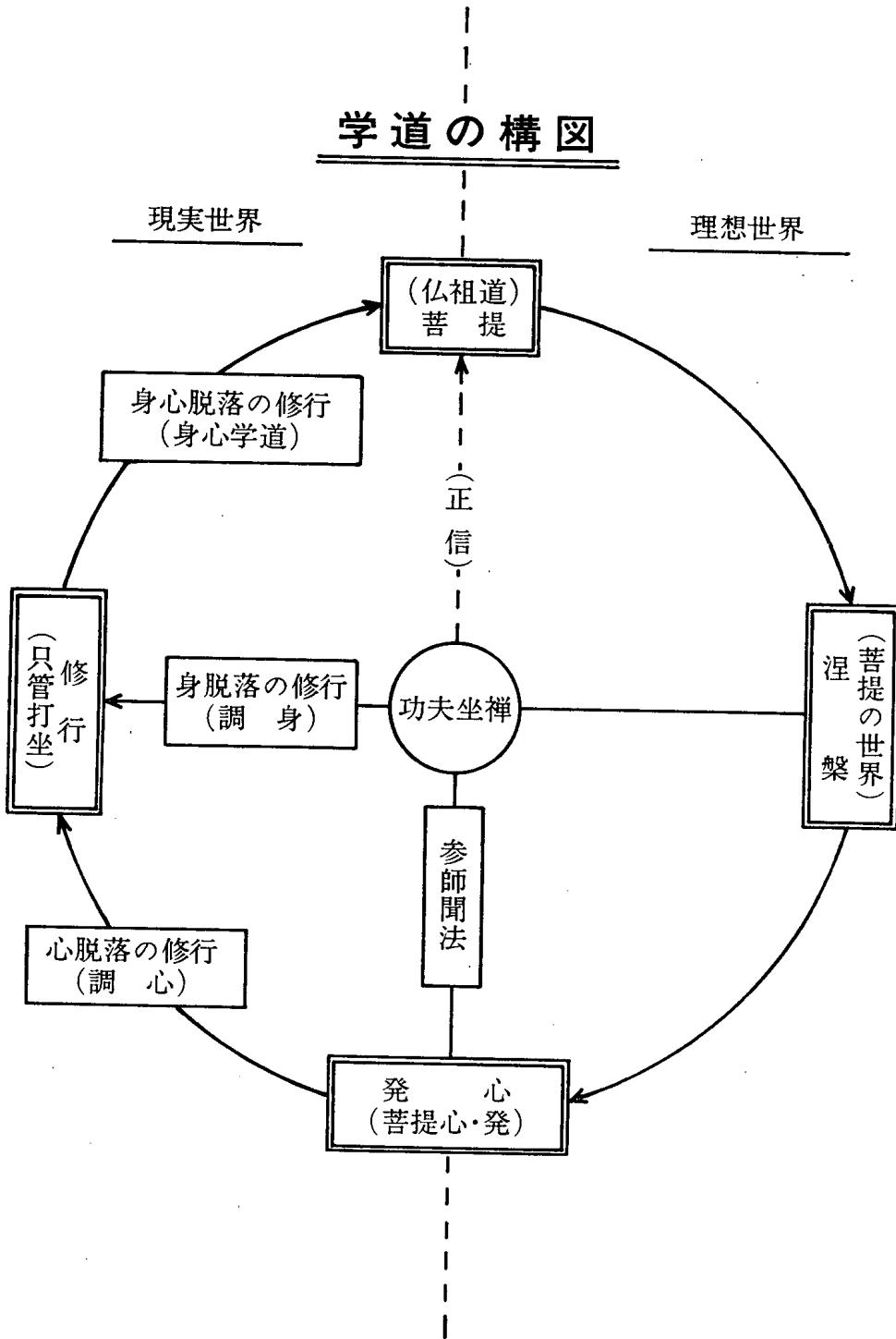
い仏祖道の世界に在つての「学道」ということになるから、「道」の外から「道」を求めるという一般の学道とは趣を異にして、いわねばならない。換言すれば、道（菩提・仏祖道）を参学するという禅師の「学道」は道中に在つての学道である。そのため、道中に在つて道を参学するということにおいて問題となるのは、参学せんとしていた「道」というよりも、むしろ「参学」 자체の方にある。言わば、実践的仕方に問題があるといえるのである。

では、「参学」とは何か、『学道用心集』においては学習としての「参師聞法」であり、参禅としての「功夫坐禅」を意味するものである。そこで以下、道中の参学としての「参師聞法」と「功夫坐禅」とは「学道」ということにおいて、どのような役割をもつているものであろうか、理解の一助に「学道の構図」を試作してみたので、これによりながら眺めることとした。

このように、「参師聞法」と「功夫坐禅」との関係は、ちようど回転軸とそれをささえているものといった関係と見なすことができる。それ故、「学道」は「参師聞法」と「功夫坐禅」とを両般となしてはいるものの、別別のものではない。いわば「学道」の威儀（構え）と作法（働き）といった両般を構成しているものである。そこで、このように構成されている回転軸を回転せしむるには、どのようにすればよいかとなれば、正師の教えの如く「功夫坐禅」して行けばよいのであるが、そのためには、自己中心的な吾我を脱落せしめなければならない。それ故、学人の「参

ことである。そのことによつて「参師聞法」の学人は「自己本道中に入り」といつた「正信」がおこり、菩提の方向への学道に進む態勢ができる。しかし、「道中に在り」という「正信」がおこつただけでは「菩提」を参学する「学道」とはならない。ただ、「参師聞法」によつて「正信」がおこることによつて「功夫坐禅」といつた学道の中心軸をささえられる威儀（作法）がととのつたといえる。しかし、「学道」の態勢がととのつただけでは「学道」とはいえないで、学道の中心軸である「功夫坐禅」を作動して軸を回転せしめなければならない。

この圖において、「参師聞法」は発心→参師聞法→功夫坐禅→菩提といった一直線上にある。ここにおいて、「参師聞法」の役割は菩提を求める心を発した「発心」の学人が、正師に参問し正法を聞受するといった「参師聞法」によって、菩提（仏祖道）を参学する仕方をしつかり確める



『学道用心集』における学道について（神戸）

「師聞法」は吾我の心脱落によつての「参師聞法」でなければならないものとなつてゐる。

また一方、この図において「功夫坐禅」は涅槃（菩提の世界）→功夫坐禅→修行（只管打坐）といつた一直線上にある。ここにおいて、「功夫坐禅」の役割は「参師聞法」の正信にささえられておこされた「功夫坐禅」をして、「涅槃（菩提の世界）」からの「功夫坐禅」たらしめることである。「涅槃（菩提の世界）」からの「功夫坐禅」であるためには、「功夫坐禅」が「修行（只管打坐）」の方向に精魂を弄したものでなければならない。そして、「功夫坐禅」が「只管打坐」となることによつて、「学道」の中心軸である「功夫坐禅」は回転し、本来の「学道」となる。そのために、「功夫坐禅」の学人は「参師聞法」により「向道」の正と不正とを知り」「菩提」の方向から離れないよう用心するとともに、「涅槃（菩提の世界）」からの「功夫坐禅」としてあるために只管打坐の「修行」に向け弛まず尽力するものでなくてはならない。

（菩提の世界）から「身脱落の修行」として行じられる「修行」でもあるということになる。そして、「功夫坐禅」の修行が、このような「修行」となることによつて「参師聞法」と「功夫坐禅」とを両般とした「学道」は全うされて行くのである。

このことからして、「道中」における「参師聞法」と「功夫坐禅」とは、ともに「只管打坐」の「修行」を行づるためのものである。「只管打坐」の「修行」を行ずることによつて、「身心脱落の修行（身心学道）」となり「菩提（仏祖道）」に証入することができる。そして、「菩提（仏祖道）」を得るために「参師聞法」から「功夫坐禅」に向かわせていた学人の「発心」をして「涅槃（菩提の世界）」からの「菩提心発」としての「発心」たらしめるのである。ここに、「参師聞法」と「功夫坐禅」とによる「学道」は「発心」→「修行」→「菩提」→「涅槃」と切れ目なく行持道環した「学道」となる。

しかも、「発心」→「修行」→「菩提」→「涅槃」と道環せしめるところの「参師聞法」と「功夫坐禅」とが、ひとたび「発心」の学人により「参師聞法」となり「功夫坐禅」となつて「只管打坐」の「修行」に向えれば、「参師聞法」にして発された「心脱落の修行」であるし、また、「涅槃

ええられた「功夫坐禪」が無限の過去から無限の未来と三世を貫き通した回転軸となって円筒に「発心」→「修行」→「菩提」→「涅槃」と無限なる広がりをもつて道環していくのである。このことからすれば、「発心」→「修行」→「菩提」→「涅槃」といった道環は、その回転軸としての「参師聞法」にささえられた「功夫坐禪」自らが時間的にも空間的にも無限なる長さと広がりをもつて道環しているのである。それ故、「参師聞法」と「功夫坐禪」とによって「只管打坐」の「修行」が行ぜられることは「道中に在って」道（菩提・仏祖道）を参考するといった「学道」が、そこに道環されていることとなるのである。

このように、禅師の「学道」は「参師聞法」と「功夫坐禪」とによって「只管打坐」の「修行」が行ぜられることである。そして、そこに「学道」が「発心」→「修行」→「菩提」→「涅槃」となって、円筒に時空を超えて展転広作されて行くのである。そこで、こういった「学道」を「発心」の学人が行ずるための用心を十箇条にして語られている。第一章は「発心」に関したもの、第二章は「発心」→「参師聞法」→「功夫坐禪」といった方向に関したもの、第三章、第四章、第五章も原則として「発心」→「参師聞法」→「功夫

『学道用心集』における学道について（神戸）

坐禪」→「菩提（仏祖道）」の方向を主としたものである。そして、第六章は「涅槃（菩提の世界）」→「功夫坐禪」→「修行（只管打坐）」の方向に關したもの、第七章、第八章、第九章も原則として「涅槃（菩提の世界）」→「功夫坐禪」→「修行（只管打坐）」の方向を主としたものである。第十章は「発心」→「参師聞法」→「功夫坐禪」→「菩提（仏祖道）」の方向における「参師聞法」と、「涅槃（菩提の世界）」→「功夫坐禪」→「修行（只管打坐）」の方向における「功夫坐禪」との二面を示したものであるが、『学道用心集』において「学道」という言葉は第五章までにはなく、第六章以降であつたといふことは、禅師の「学道」が「涅槃（菩提の世界）」→「功夫坐禪」→「修行（只管打坐）」といった方向において、主に学人に説かれていたことを示唆するものである。そして、この方向における「功夫坐禪」は「発心」→「参師聞法」→「功夫坐禪」→「菩提（仏祖道）」といった方向の「功夫坐禪」が「参師聞法」により「学道」への「威儀（構え）」となつてゐるのに対して、「涅槃（菩提の世界）」からの「功夫坐禪」は「学道」への「作法（行道）」となつてゐることを示している。以下、こういった構造をもつた「学道」が、どのように『学道用心集』の文中において開示されている

『学道用心集』における学道について（神戸）

か、各項目を中心にながら窺うこととしたいたい。

## 二、学道の仕方

### 1、菩提心を発すべき事

「発菩提心(発心)」は、道(菩提・仏祖道)を参考せんとする学人にとつて不可欠の必要条件である。この「発心」を「学道の構図」においてみると、その役割は「参師聞法」にさせられた「功夫坐禅」と、その「功夫坐禅」を道環する「只管打坐」の「修行」に向わせるための「心脱落の修行(調心)」とある。このような方向を持つた「発心」は学人によつて発されたものであるが、図においては「涅槃(菩提の世界)」から「菩提心発」と菩提心自ら発されたものともなつてゐる。このことは、学人の「発心」が「心脱落の修行(調心)」への「発心」であるためにには「菩提心発」としての「発心」でなければならないことを意味する。そこで、学人の「発心」が「菩提心発」としての「発心」であるためには、どのようにすればよいか、以下、本文に窺つてみよう。

このように、観無常心による「発心」は「心脱落の修行(調心)」と「身脱落の修行(調身)」とを生起せしめて、「身心脱落の修行(身心学道)」ならしめて行くのである。しかし、こういつた「学道」から外れ離れて行くのは何故かといえば、「道中」の「発心」は吾我名利に拘らないものであるにかかわらず、吾我名利の妄念に執われて行くからという。そのため、吾我名利を抛てといふ。即ち、「心脱落の修行(調心)」でないから、「道中」における本来の

「学道」から離れて行くこととなる。また、菩提心を「無上正等覚心」とか、「一念三千の観解」とか、「一念不生の法門」とか、「入仏界の心」とかいうのも、「心脱落の修行（調心）」以後においていわれている妙行であつて、そこには吾我名利の邪念による修行はないとする。

そこで、「発心」が本来の「学道」となつて道環するには、「唯、暫く吾我を忘れて潛に修す」ことであるが、吾我を忘れて修行することは一般的にいつて困難である。そこで、その方法として「若し我見起る時は静坐觀察せよ」と示されている。即ち、「参師聞法」にさせられた「功夫坐禪」の方面から、「修行」をせよと教示している。このことは、禅師の「学道」が「調心」より、むしろ「調身」に力点が置かれたものであることを物語るものである。

『学道用心集』における学道について（神戸）

「提心発」としての「発心」を発さしめている。

## 2、正法を見聞して必ず修習すべき事

この「正法を見聞して必ず修習すべき事」を「学道の構図」に当てはめながら理解すれば、次の如くであろう。即ち、学人が学道に向う第一要件として「発心」があげられていたわけであるが、この発心は、まず「参師聞法」ということから出発する。そして、「参師聞法」にて見聞した正法は、ただ見聞におわらせず、必ず「身脱落の修行（調身）」としての「只管打坐」の「修行」をすべく「功夫坐禪」を修習すべきであるとするのである。

そこで、「只管打坐」の「修行」を学人が修習するには、忠臣の一言を容れることのできる明主のように、仏祖の一語をそのまま信受することのできる法器でなければならぬという。このことは、「参師聞法」によって正法を見聞したならば、それをそのまま受けとることのできる「正信」の学人でなければならないことである。そして、参学の学人が、このように正法を信受することによつて、「身脱落の修行（調身）」として「只管打坐」の「修行」が打出されるための「功夫坐禪」が修習される。このことは、同時に「心脱落の修行（調心）」により「学道」としての「修

行（只管打坐）」が打出されることもある。

### 3、仏道は必ず行に依って証入すべき事

学道において「参師聞法」と「功夫坐禅」とは学道を伸展せしめる原動力ではあるが、「学道の構図」にみるよう、「参師聞法」は「菩提（仏祖道）」を指示示しているもの、 「菩提（仏祖道）」へ到る道はその方向にはついていない。また、「功夫坐禅」も「身脱落の修行（調身）」により「只管打坐」の「修行」とはなつても「菩提（仏祖道）」への方向を向いてはいない。しかし、「功夫坐禅」からの「只管打坐」の「修行」が「参師聞法」によつて方向づけられると、それは、「菩提（仏祖道）」への方向に向かつた。それ故、「学道」においては「参師聞法」による「行」が菩提に証入するためには大切であるとしている。

→「涅槃（菩提の世界）」といつた証悟の世界は「功夫坐禅」→「修行（只管打坐）」への妙修となつてゐる。それで、学人が「只管打坐」としての「功夫坐禅」をすれば、それで、学人が求めんとする証悟の世界が、そこに行ぜられてゐるのであって、いうところの修証一等・本証妙修といつたものである。

このように、「只管打坐」としての「功夫坐禅」を行はずれば、「学道」の目的は達せられてゐるわけである。それならば、この「修行」は如何に立てたらよいかといえば、「行を迷中に立てて証を覚前に獲ることを」といつて、「行を迷中に立てて証を覚前に獲ることを」といつて、「只管打坐」の「修行」となつてゐる。「発心」から「修行（只管打坐）」→「菩提（仏祖道）」までを「現実世界」とし、「菩提（仏祖道）」から「涅槃（菩提の世界）」→「発心」までを理想世界とすれば、この吾我名利の迷妄に執われた「現実世界」にあって、吾我名利の迷妄を脱落した「修行（只管打坐）」を行ふこと。即ち、「参師聞法」により、「只管打坐」としての「功夫坐禅」を行ふことであるとする。そこに、吾我名利の迷妄無き「理想の世界」が「覚前に獲」られているといふ。

それでは、「理想の世界」を「覚前に獲る」という、「只

「管打坐」としての「功夫坐禅」はどのような立場にあるかといえば、「只管打坐」としての「功夫坐禅」は「參師聞法」により「菩提(仏祖道)」を指向したものであるが、「只管打坐」としてのものであるが故に、「身脱落の修行(調身)」としての「功夫坐禅」である。また「只管打坐」としての「功夫坐禅」は「菩提(仏祖道)」を指向したものであるが故に、「心脱落の修行(調心)」としての「功夫坐禅」である。そして、こういった「只管打坐」としての「功夫坐禅」でもある。そして、こういった「只管打坐」としての

「功夫坐禅」における「身脱落の修行(調身)」も「心脱落の修行(調心)」も、ともに「理想の世界」である「涅槃(菩提の世界)」からの「功夫坐禅」として、あるいは「菩提心発」をして行ぜられたものである。それ故、「只管打坐」としての「功夫坐禅」は、それが「只管打坐」であるが故に「參師聞法」による「功夫坐禅」が、そのまま「発心」→「修行」→「菩提」→「涅槃」といった学道に伸展し道環しているといわねばならないものとなつていて。

#### 4、有所得の心を用いて仏法を修すべからざる事

「学道」が「発心」→「修行」→「菩提」→「涅槃」と「功夫坐禅」を軸にして道環するには、軸となつている「功夫坐禅」が「修行(只管打坐)」に向つて「身脱落の修行(調

身)」として行ぜられねばならないことは「学道の構図」に見ることである。このように、「功夫坐禅」は「菩提(仏祖道)」のためにおこされたものではあっても、その実、菩提(仏祖道)」を求めるために行じられてはいない。それにもかかわらず、一般には「有所得の心を用つて」「功夫坐禅」が修され易いのであらう。それ故、こここの項目では「有所得の心を用いて仏法を修するべからざる事」として説いている。

そこで、もし「功夫坐禅」が「修行(只管打坐)」以外に向けてのもの、例えば、名利の為、果報の為、靈験の為ということになれば、「功夫坐禅」を軸とした「学道」は道環しないといわねばならない。もし、何何のためといふならば、「功夫坐禅」は「只管打坐」の「修行」の為に修すべきとなる。「只管打坐」の「修行」の為に修すことは、図のごとく「功夫坐禅」を軸として「学道」を道環せしめることであるから、「功夫坐禅」にしてみれば、本来の方に向に自己展開しているにすぎない。この無所得の「功夫坐禅」は「菩提(菩提の世界)」からの「身脱落の修行(調身)」であり、「菩提心発」による「心脱落の修行(調心)」であつて「只管打坐」の「修行」そのものにほかならない

のである。

### 5、参禅学道は正師を求むべき事

前4節において、無所得の「功夫坐禅」が説かれていた。そして、この「功夫坐禅」は「只管打坐」のためであつて、「菩提」のためでもなかつた。そこで、こういつた「功夫坐禅」を行るために学人は、どのようなことが最も大切なことであるとなれば、「功夫坐禅」といった軸をささえているのは「参師聞法」であつたから、この「参師聞法」如何によつて、「功夫坐禅」を軸とした「学道」が歪みのない「学道」となるかどうかを左右するということになり、「参師聞法」が如何に大事なことであるかがわかる。そして、「参師聞法」とは、正師に正法を参問して正師から正法を聞受することであるから、「正師を求むべき事」にかかるものであることが知られる。

このような「参師聞法」は「学道の構図」において、どのような立場に置かれているかといえば、「発心」から「功夫坐禅」への線上にある。このことは、「発心」により「菩提(仏祖道)」が求められて行くに、その指針としての役割をしているものである。「発心」により打出された「功夫坐禅」が正しく方向づけられた行道となるためには、師の

正と邪によるとする。そして、師と学人の関係は、ちょうど工匠と良材のようなものとしている。良材であつても良工を得なければ駄目であるし、たとい曲木であつても良工を得れば本来の持ち味があらわされる。これと同じように学人の「功夫坐禅」が本来の道中における「功夫坐禅」をなわち「心脱落の修行(調心)」「身脱落の修行(調身)」といった「只管打坐」の「修行」としてあるためには、「参師聞法」としての「師」にかかわっているとしている。それ故、「参師聞法」にさもえられた、学人の「功夫坐禅」も、それが「正師」に対しても「参師聞法」でなかつたらば、「功夫坐禅」をしたとしても「学道」とはならない。それどころか、かえつて惑乱を起かさしめ、邪念を生ぜしめるもととなるという。そこで、このように重要な「正師」を定義して「正法を明めて正師の印証を得るものなり。文字を先とせず、解会を先とせず、格外の力量有り、過節の志氣有りて、我見に拘らず、情識に滞らず、行解相応する是れ乃ち正師なり」と述べて結んでいる。如上に定められている「正師」とは要するに「菩提(仏祖道)」を「身脱落の修行(調身)」により身証し、「心脱落の修行(調心)」により心解して「参学」している人、即ち、「学道」

に在る人のことである。

## 6、参禅学道に知るべき事

「功夫坐禪」が「只管打坐」の「修行」であるためには、「参師聞法」の「正師」によるところが大であったが、ここでは、「功夫坐禪」の視点を「涅槃（菩提の世界）」から「功夫坐禪」→「修行（只管打坐）」に置き、そこにおいて知るべき事を述べている。

禅師はまず、「参禅学道は一生の大業なり、忽せにすべからず、豈卒爾ならんや。」と、「功夫坐禪」「只管打坐」といった修行による「学道」を説いている。そして、こういった坐禪による行道は仏祖の遺跡であるという。また、坐禪は釈尊が無量劫來難行苦行して体得した「修行（只管打坐）」である。それ故、坐禪は難行だから坐禪以外の易行をと志さしてはならないという。特に、「菩提（仏祖道）」を参考しようとする学人は、この「修行（只管打坐）」でなければ、「学道の構図」にて知られるように「菩提（仏祖道）」に到達することは出来ないのである。また、禅師の「学道」において、「身心脱落の修行（身心学道）」である「只管打坐」の「修行」のみが、「菩提（仏祖道）」によく証入するものであるから、それがどんなに難行難解であつ

『学道用心集』における学道について（神戸）

ても、その「修行（只管打坐）」に依るより方法はないことになる。

禅師も「只管打坐」の「修行」は難行難解であるとし、好道の士は易行に志さしてはならないとする。しかし、禅師のいう難行は肉体的に心理的に難行であるということより、「身行を調うる事」「心操を調うる事」がもつとも難しい事であるといつてはいる。即ち、「身脱落の修行（調身）」「心脱落の修行（調心）」としての「只管打坐」の「修行」をすることがもつとも難行難解であるという。換言すれば、「調身」し「調心」することが難しいとしている。<sup>(1)</sup>そして「菩提（仏祖道）」に証入するには「聰明を先とせず、学解を先とせず、心意識を先とせず、念想觀を先とせず、向來都て之を用ひずして身心を調へて以て仏道に入るなり」というように、身心を調えて「修行（只管打坐）」することによつてであるという。即ち、「涅槃（菩提の世界）」から行ぜられている「功夫坐禪」の「修行（只管打坐）」には思量分別等の計いの入る余地のないものといわねばならないであろう。

註

(1) 「調身」と「調心」について、『学道用心集』の撰述され

## 『学道用心集』における学道について（神戸）

た前年（一一三三）に淨書された自筆本『普勸坐禪儀』に、「調身」は「正身端坐」することであるとしており、「調心」については「念起即観、観之即失、久久忘線、自成一 片」として、これが只管打坐の要術であるとしている。しかし、その後、『正法眼藏』「坐禪儀」（一二四三年示衆）や、流布本の『普勸坐禪儀』となると、「調身」は「正身端坐」することで同じであるが、「調心」においては「思量箇不思量底なり。不思量底如何思量、これ非思量なり。」（『正法眼藏』「坐禪儀」の訓みによる）となつていて。この相違は何によるものであろうか。思うに、それは学人に対する「学道」の示し方にあると思われる。即ち、自筆本の時代（一一三三）は『学道用心集』や『正法眼藏隨聞記』が説かれたと同じく、禪師の許に參集してきた僧俗の学人の立場より正伝の仏法がもっぱら宣揚されていたのであるが、これに対し、『正法眼藏』「坐禪儀」が示衆された時代（一一四三）は、今まで興聖寺にあって、僧俗の育成と教化に専念していた禪師が、深山幽谷の越前の志比庄に移り住み、もっぱら仏祖の立場より仏作仏行の出家僧に視点をしづつて説示はじめたためと考えられるからである。

7、仏法を修行し出離を欣求する人は須らく參禪すべき事

「菩提（仏祖道）」を參学する「学道」によって「菩提（仏祖道）」→「涅槃（菩提の世界）」といった理想の世界を欣求せんとする学人は、參禪（坐禪）をすべきであるとする。この坐禪は「学道の構図」においては、「涅槃（菩提の世界）」から行じられているところの「功夫坐禪」→「修行（只管打坐）」といった坐禪であり、結局「功夫坐禪」の力を軸にして「発心」→「修行」→「菩提」→「涅槃」といった「学道」を道環させることである。「学道」が道環するところに「菩提（仏祖道）」→「涅槃（菩提の世界）」が時空を超えて単伝している。それ故、道環せしめる坐禪を行じなければならぬ。そのため、釈尊から迦葉へと、西天二十八代、東土六代と「菩提（仏祖道）」→「涅槃（菩提の世界）」といった本来の世界を伝えてきた諸祖が皆、坐禪を行じ坐禪を伝えていたのである。このことは、坐禪を行じ坐禪を伝えることが「菩提（仏祖道）」→「涅槃（菩提の世界）」を身証し伝えることとなつていてるのである。

そこで、參禪（坐禪）をする学人は、「涅槃（菩提の世界）」から「功夫坐禪」→「修行（只管打坐）」といった本物の坐禪を行じ、葉公の龍を愛するような愚かなことをしてはならないという。しかし、神丹以東の諸国にあっては、

仏書は伝わっているとはいへ、「学道」の方向を踏み外し、吾我名利の魔坑に墮ちてしまつてゐるという。それでは、「学道」を道環せしめる「涅槃」→「功夫坐禅」→「修行(只管打坐)」といった参禅(坐禅)を修行するにはどうすればよいかといえば、「初め門に入るの時、知識の教えを聞いて教の如く修行す。」といふ。即ち、「参師聞法」にさせられて、その如く修行するところに、「功夫坐禅」は「菩提(仏祖道)」を指向しながら「身脱落の修行(調身)」となつて、「只管打坐」の「修行」を行っていくことになるとしている。

#### 8、禅僧行履の事

「学道」せんとする学人の参禅は「涅槃(菩提の世界)」→「功夫坐禅」→「修行(只管打坐)」の方向にある参禅、即ち「只管打坐」の坐禅修行であつた。そして、この坐禅修行(只管打坐)をする禅僧(学人)は如何になければならないかといふに、六祖慧能の五祖弘忍に対するよう、二祖慧可の初祖達摩に対するような心構えを示し、それは「心に於ても身に於ても住することなく、著すること無く、留まらず、滞らざ」のものでなければならないと述べている。だからといって、「発心」→「参師聞法」による「功夫打坐」の「修行」へというように、まず「身脱落の

夫坐禅」としての坐禅は「功夫坐禅」にどどまり、「只管打坐」への方向に向いていないから、本来の坐禅ではないかといふに、そうではなく「参師聞法」にさせられての「功夫坐禅」も「涅槃(菩提の世界)」からの「功夫坐禅」も同じ「功夫坐禅」である。ただ「菩提(仏祖道)」を向いているか「修行(只管打坐)」を向いているかである。そこで、菩提を参学せんとする学人に對して、「参学の人、且く半途にして始めて得たり、全途にして辞すること莫れ」と説いてゐる。

これを「学道の構図」にて眺めてみると、「面目を黄梅に失し、臂腕を少室に断ず。髓を得、心を翻して風流を買ひ、拝を設け歩を退いて便宜に墮つ」といった諸祖の坐禅は、熱烈なる発心によるものであることは勿論、「心脱落の修行(調心)」となつた坐禅であり、「身脱落の修行(調身)」となつた坐禅であるとする。即ち「只管打坐」となつた坐禅を示している。しかし、この坐禅は「発心」→「修行」→「菩提」→「涅槃」と「只管打坐」の「修行」となつて道環している「学道」ではあるが、「発心」による参学の学人からの「功夫坐禅」は「身脱落の修行(調身)」から

『学道用心集』における学道について（神戸）

修行(調身)」の方面からといった一方(半途)からの坐禅によって、「只管打坐」の「修行」を始めて体得していくのである。ところが、國によつてみると、「身脱落の修行(調身)」を行づる「功夫坐禅」は「心脱落の修行(調心)」をともなわない半途のものということに外見上なるかもしれないが、けつして全途に対する半途ということではない。むしろ、「身脱落の修行(調身)」を行づる「功夫坐禅」は「涅槃(菩提の世界)」からの行としての「功夫坐禅」であるから、そこに「心脱落の修行(調心)」も含まれている。それ故、半途にして初めて全途の「学道」を得するというのではなく、初めから全途の「学道」にありながら「身脱落の修行(調身)」としての「功夫坐禅」が行ぜられているといふことになる。このことは、学人の行ずる「功夫坐禅」は半途にありながらしかも全途であるといふことである。また、全途も単なる全途ではなく、「身脱落の修行(調身)」として全途にとどまることなく、常に半途に自己を開示しているが故に、学人の「学道」も成り立つのであるといわねばならない。

9、道に向つて修行すべき事

「参師聞法」にささえられた「功夫坐禅」は、ただ半途

にとどまらず「涅槃(菩提の世界)」からの「功夫坐禅」であつて、「只管打坐」の「修行」を行じていくものである。この「只管打坐」の「修行」が禪僧の学道であるというのであるが、学道をする以上、歩一步と進むべき方向がなければならぬ。そして、その方向をここでは示しているのであるが、その方向とは「道に向つて」であるといふ。「道」とは「学道の構図」からすれば「菩提(仏祖道)」であるが、その「菩提(仏祖道)」に向うには、まず、その向い方や方法の正・不正を知らねばならぬとして、向うべき目的としての「菩提(仏祖道)」を述べている。そこで「菩提(仏祖道)」とは「仏能く自ら悟り、仏に伝へて今に断絶せず」もので、仏でなければ「菩提(仏祖道)」を得ることはできないとしている。このことは声聞縁覚の立場から「菩提(仏祖道)」に向うということではなくて、仏の立場から「菩提(仏祖道)」に向うことである。換言すれば、「菩提(仏祖道)」に向うには、「菩提(仏祖道)」の世界(涅槃)に向う、「菩提(仏祖道)」へといふことにおいて、正しい学道となるとする。それでは、その「菩提(仏祖道)」の世界は何処にあるかといふに、「人々の脚跟下なり」という。学人の「発心」「修行」といった現実の世界のこと

るにあるというのである。「学道の構図」では、「発心」によって「菩提(仏祖道)」に向う「修行(只管打坐)」を直下に行するには、「発心」が「涅槃(菩提の世界)」からの「菩提心発」であれば「菩提(仏祖)」に向つての「修行(只管打坐)」となつてゐるのである。

ところが、一般には「菩提(仏祖道)」に向つて行くといふと、遠い彼方に向かつて行くものと思つてゐる。そのため、「菩提(仏祖道)」を正しく参考することから外れてしまふといふ。そこで、「菩提(仏祖道)」を参考する学人は「自己本道中」に在つて、迷惑せず、妄想せず、顛倒せず、増減無く、悞謬無しといふことを信すべし」といふ、そして、その上で参考せよといふ。それには、まず「意根を坐断して、知解の路に向はざらしむ」こと、即ち「心脱落の修行(調心)」をすることであるが、参考の学人の側からすれば、「参師聞法」に随つた修行をすることである。この修行は「功夫坐禅」ということになる。してみると、「参師聞法」にささえられた「功夫坐禅」によって「心脱落の修行(調心)」により指向された「道に向つての修行」をするということになる。それには、「功夫坐禅」が「只管打坐」の「修行」でなければならない。「只管打坐」の「修

行」であれば、そこには「身心を脱落し、迷悟を放下す、第二の様子なり」といった「身心脱落の修行(身心学道)」に承当した、いわゆる「道に向つての修行」が参考されてゐることになる。それ故、「道に向つての修行」をするには、道中に在ることを信受し、「只管打坐」の「修行」を奉行することであるといふことになる。

#### 10、直下承当の事

『学道用心集』において「発心」の学人が「菩提(仏祖道)」に向つた「身心脱落の修行(身心学道)」をするには、「参師聞法」と「功夫坐禅」とによることが必要であったし、また「参師聞法」と「功夫坐禅」との両般によつて「身心脱落の修行(身心学道)」としての「学道」があるとされた。そこで、この「身心脱落の修行(身心学道)」をするには、「学道の構図」からすれば、「只管打坐」の「修行」をすればよいといふことになる。また、この「只管打坐」の「修行」は「心脱落の修行(調心)」と「身脱落の修行(調身)」とを踏えたものとなつてゐる。

ところが、「心脱落の修行(調心)」は、菩提自ら発するということになる。それには、「功夫坐禅」が「只管打坐」の「修行(調心)」といふことになるが、学人の「発心」は

『学道用心集』における学道について（神戸）

「世間の生滅無常を觀する心」によって発されるとしているのであつたがら、菩提自ら發すとする「菩提心発」とはいえない。<sup>(1)</sup> それ故、学人によつての「発心」は「心脱落の修行（調心）」→「修行（只管打坐）」、そして「身心脱落の修行（身心学道）」といつた「学道」とはならない。そこで、もう一方の「身脱落の修行（調身）」の側についてみれば、これは「功夫坐禅」の働きによるものであつて、しかも「涅槃（菩提の世界）」から發されたものである。このことは、「但、他の証に隨ひ去るを直下と名け、承当と名くるなり」と述べられてゐるようだ。「涅槃（菩提の世界）」に随つた「功夫坐禅」をすれば、それは「只管打坐」の「修行」としての「功夫坐禅」であるといえる。しかし、「菩提（仏祖道）」に向けでの「身心脱落の修行（身心学道）」としての「学道」となるには「菩提心発」による「心脱落の修行（調心）」の方向が必要である。それには「只管打坐」の「修行」としての「功夫坐禅」が、「參師聞法」に指向された「功夫坐禅」であることにより「菩提（仏祖道）」を参考する「只管打坐」の「修行」、いわゆる「身心脱落の修行（身心学道）」としての「学道」に直下承当したものとなる。また、このことによつて「菩提（仏祖道）」を

参考する「只管打坐」の「修行」は「菩提心発」による「心脱落の修行（調心）」と軌道を同じくしたものとして示されている。

このことからして、「菩提（仏祖道）」を求めて「発心」した学人が「身心脱落の修行（身心学道）」としての「学道」をするには、ただ「只管打坐」の「修行」としての「功夫坐禅」をするだけではなく、「參師聞法」により、「学道」から外れないようになされられて行くことにより、学人をして、仏祖が正伝した「菩提（仏祖道）」を参考することができる。それ故、『学道用心集』における「学道」は「參師聞法」にさせられた「只管打坐」の「修行」としての「功夫坐禅」をすることであるが、その「只管打坐」の「修行」としての「功夫坐禅」は具体的には「身脱落の修行（調身）」に向けての坐禅、即ち「正身端坐」をすることであつたということになるであろう。

註

(1) 褪師が越前志比庄に向つた寛元元年（一二四三）の翌年に、吉峰寺にて示衆した『正法眼藏』「發菩提心」には「菩提心をおこすこと、かならず慮知心をもらるる。菩提は天竺の音、ここには慮

知心といふ。」の慮知心にあらざれば、菩提心をおこさむことあたはず。」の慮知心をもて菩提心をおこすなり。」とある。

『学道用心集』における学道について（神戸）